

自己決定する経験を積むことで、登校しぶりのある児童が前向きに学校生活を送る姿を目指して

南魚沼市立おおまき小学校  
瀧本 樹(平成20年度)

## I 主題設定の理由

本児は入学当初、通常学級在籍で体調不良を理由に欠席することが多かった。4学年になり、1学期の期間で欠席日数・遅刻日数が増加してきた。9月下旬頃、本人のペースで学校生活を送れるよう保護者や南魚沼市教育委員会と話し合いの上、特別支援学級に在籍することになった。特別支援学級在籍当初は、学習の難しさ、朝の登校時間に気が向かない等の理由で登校時間に間に合わせた登校が難しい状況であった。土日に野球の習い事があり、月曜日は疲れを理由に欠席する傾向があった。翌日の火曜日から徐々に調子を上げて登校することが多かった。4学年の冬休み明けは連続して欠席することがあった。

保護者は学校に行ってほしいという思いが強かったので、児童の送迎には協力的であったが、無理強いしてでも連れて行こうとすることがあった。送迎で玄関前までは登校できるが、車を降りられず「お腹が痛い」と訴えたり、車内で大声を出して泣きじゃくったりする場面があった。

一方、学校に入れば、真面目に学習に取り組んだり、自分から全体の前で発表したりする姿もあった。

このように、自分で納得して行うことに対しては、落ち着いて過ごす姿が見られたが、自分が納得していない場合は、体の不調を訴える傾向があった。そこで自分で決めて納得した上で行動し、できたという経験を積むことが本児の自信につながり、安定した気持ちで前向きに学校生活を送る姿となって現れると考え、本実践を行うことにした。

## II 目指す子どもの姿

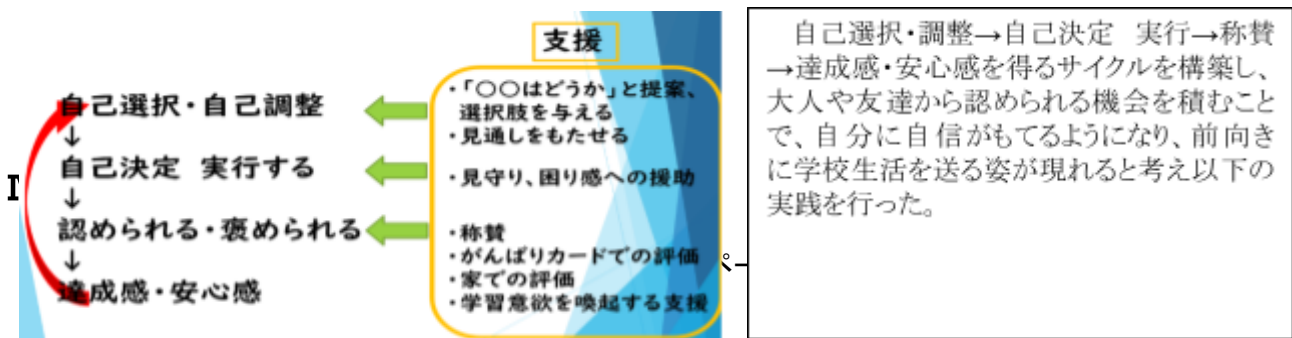
自分の行動について、自己選択の機会をつくり、自己決定する経験を積むことで、学校に登校し、学習の仕方を選択したり、自分の考えを伝えたりすることができる。

## III 本児の実態

特別支援学級在籍前は、「朝の登校時刻(8:10)に間に合わせなくてはいけない」「宿題が終わっていない、どうしよう」「歩いて登校するのは疲れる」「気分が乗らない」「お腹が痛い」「無理矢理学校に連れて行かれる」「玄関前に着いたら車から引きずり下ろされる、嫌だ」等の理由をもっているようだった。落ち着いた気持ちではない時に本人の気持ちを聞き出すことは難しく、また、自分の気持ちを伝えるための語彙力が不足していて、自己理解も十分ではない実態があった。また、学校では積極的に発表をしたり、係活動やお願いされたことに真面目に取り組んだりする姿からしっかり者と思われていた。一方、ワーキングメモリーに低さから学習の定着に時間がかかり、やるべきことを忘れることがあるため、怠けたと誤解され注意を受けることもあった。

WISC-IV(R2.9月 4年時) FSIQ80 VCI93 PRI76 WMI82 PSI83

これらの実態から「前向きに学校生活を送る姿を目指すためのサイクル(図1)」を考えた。



## V 実践の結果

(1) 自己選択・自己決定の場の設定

### ① 登校時刻の自己選択・決定

在籍当初は、「何時に登校してもよく、登校時刻を決めたら自分で学校に電話で連絡すること」を約束し、実践するようになった。始めの頃は始業時刻8:10までに登校できないときは「休みます」という連絡があった。「午後から来たり、給食だけ食べて帰ったりする登校でも良いこと」を伝えることで、欠席はせず、給食だけ特別支援学級で食べて下校したり、午後から登校して特別支援学級や交流学級で学習したりできるようになった。登校時刻を自分で選ばせることを継続したことで、8:10までに登校できなくても、「〇時間目に行きます」と自分で決めて電話連絡をし、送迎により登校できるようになった。

連休明けや長期休業明けに調子が上がらず、休むことがあった。そこで、長期休業明け前に何日かプレ登校を実施することで、休業明けからスムーズに登校できるようになった。

入学1学年から6学年6月までの欠席(図2)・遅刻(図3)グラフを以下に示す。

在籍後の遅刻日数の急激増加は登校時刻を自己選択させたことによるものである。5年時の欠席増は4月から徒歩での登校に挑戦した結果、疲労して休んだり、GW後に気持ちの不調があったりしたため。

(日)

## ② 学習場所と学習方法の自己選択・決定

在籍当初は、学校へ毎日登校することを目標にし、学習場所は登校してから相談して決めた。始めは体育や総合的な学習、音楽は交流学級に参加し、他の教科は特別支援学級で学習をすることとした。特別支援学級では欠席して遅れている内容や、未定着の内容を補う学習を進めた。その結果、理科や社会のテストで高得点が取れたことに喜び、学習への意欲や自信が少しずつ戻ってきた様子が伺えた。交流学級での学習で困ったら支援員に助けを求めてよいことを伝え、国語・算数以外の教科に参加してみることを提案すると承諾し、ほとんどの時間を交流学級で学習できるようになった。参加の際は交流学級での授業内容や学校行事の内容を交流担任と事前確認し、本児に提示することで見通しをもって選択できるようにした。

特別支援学級では在籍から一か月程度、算数の苦手さに対して九九やわり算等の基礎の定着や国語の漢字定着を補った。定着が見られた頃から本児と相談し、教科書に沿った学習に取り組んだ。

## ③ 保護者との連携

在籍時に個別の指導計画を作成し、本児が毎日登校できるための支援の方向性を確認した。㊦登校を強制ではなく自己決定できるような声掛けをする。㊧8:10までに登校できなかつたときに学校への電話連絡を本人がする。㊨日々の送迎。㊩がんばりカード達成の報酬(家族で楽しめる内容)による意欲喚起。等をお願いした。父・母・祖父母の協力により毎日登校できるようになった。安定して登校できるようになってきたため、4年生の春休み前に自力登校を提案したら、5年生の4月から登下校とも歩くことに決めてチャレンジした。しかし疲れが溜まり、2日ほど欠席したため、保護者に相談すると疲れて辛そうとのことだった。そこで本人と決めた目標の再調整をし、登下校の送迎を再開し、慣れてきたら少しずつ目標を上げていくことを本児と確認した。歩きの負担が減ったことでその後、欠席は減った。

## (2) 全校体制で取り組む授業改善と個に合わせた学習ペース

### ① 全校体制で取り組む授業改善

1時間の学習の中で、原問題に対して既習内容や視点カードを活用しながら、解決したいこと、目標達成に向けてすること等を明らかにして◎(追求課題)が決定する。追求課題に対して担任からの手立てを活用しながら児童が考えをノートに書き、発言、共通することや違い等を整理して、まとめ(学び)にしていく。特別支援学級での国語・算数だけでなく、交流学級での理科や社会等も同様のスタイルで学習を進めているため、見通しをもって学習に取り組めた。また、課題を追求していく学習スタイルにより、交流学級の授業で自分の考えを発言する場面も増え、学習への意欲、学力の向上が見られた。

### ② 個に合わせた学習ペース

在籍当初は表情が強張り、緊張している様子が見られたため、特別支援学級での学習後、運動やカードゲーム等で気分転換をする時間が必要と感じた。特別支援学級が安心して過ごせる場所になるために、気分を発散する時間としてリラックスタイムを設定した。当初は20分程度実施することもあったが、6学年となった現在では、本児が「なくても平気です」と言えるほど成長してきた。

## (3) 自立活動の充実

### ① 異学年と交流する活動

週2時間、在籍児童全員で行う自立活動を行っている。自立活動では主に「身体の動き」「人間関係の形成」「コミュニケーション」の領域の内容に取り組んでいる。始めた頃は自分ができればよく、他の友だちへの配慮はできなかった。学習を重ね現在は、最上級生として下学年に丁寧に教え、指示をしたり、手本になろうとしたりす

る姿が多く見られるようになった。

## ② 地域への発信

南魚沼市教育長から自立活動を通して制作した作品を市立図書館に展示したいとの要望を受けた。作品や活動写真、見所を掲示したり、鑑賞者からのコメントをもらったりできるようにした。市のホームページに掲載され、地域の方の感想をもらうことで、次の活動への意欲につながった。

## VI 成果と課題

### (1) 成果

本実践の成果を概要図(図4)として示す。

#### ① 自己選択・自己決定を繰り返したことによる自己調整・自己理解、言葉で伝える力の向上

毎日登校して学校で過ごすために体力・気力を調整することが大切であることを本児と確認した結果、以下の力が付いた。

##### ■自己調整・言葉で伝える力

- ・習い事に行く日を体調に合わせて減らす調整をした。
- ・自分の体調によって登校時間を決め自分で学校に電話した。
- ・5学年後半には「下校は歩いて帰ってみる」と職員と保護者に伝え、6学年現在も徒歩下校している。

##### ■自己理解・言葉で伝える力

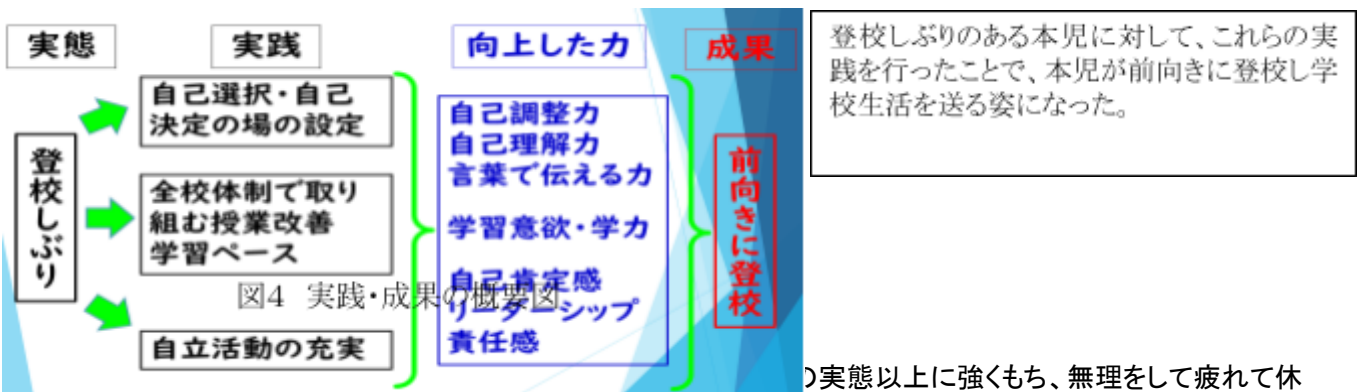
- ・「ときどき学校に気が向かない時があるけど、前より気が向く日が増えてきた」と自己を見つめる発言が増えてきた。
- ・中学校見学後は「中学校でも国語・算数はひかり(特別支援級)みたいな所で勉強する方が合いそうだな」と中学校でうまくやっていく方法についての発言が聞かれた。

#### ② 全校体制で取り組む授業改善と個に合わせた学習ペースによる学習意欲・学力の向上

- ・未定着内容を補いつつ、全校体制で統一した学習スタイルにすることで、安心して学習に取り組んだ。
- ・本時の課題は何か、解決方法等、本児が主体的に考える姿になり、意欲的に学習に取り組むようになった。
- ・学力検査NRT・CRTの点数が向上した。全国学力テストでは算数で県の平均点を超えた。

#### ③ 自立活動の充実による自己肯定感・責任感・リーダーシップ力の向上

- ・下学年に丁寧に教え、指示を出し手本になろうとする姿が増えた。
- ・交流学級では6学年学級代表に立候補し、教室で率先して行動する姿が増えた。



実態以上に強くもち、無理をして疲れて休みがちになることがあった。本児が自己調整をして無理なく続けていける目標立てができる力を身に付けることが必要と考える。今後も、本児の成長のために一緒に取り組んでいきたい。

### 参考文献

- ・文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年度告示)
- ・文部科学省 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編・自立活動編(平成30年3月)
- ・喜多好一編著 通級指導教室 発達障害のある子への「自立活動」指導アイデア110(2019年)